



皮膚炎のゆらぎと生活習慣の関係についての着想

澤田 雄宇
産業医科大学皮膚科学教室教授

産業医科大学医学部を卒業後、専属産業医として3,000名を超える従業員の健康を見守ってきました。私と話すことで少しは元気を取り戻せるようで、休憩時間には健康管理室が従業員で賑わい、楽しい会話が交わされることがよくありました。その中には乾癬やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患を抱えている方が少なからずおられ、ある従業員が皮膚疾患について話をしてくれたことが、いまでも鮮明に思い出されます。その方は皮膚疾患の症状がある一定の法則に従ってよくなったり悪くなったりするといい、とくに顕著に症状が悪化するのには、喫煙や暴飲暴食をした後、または夜間交代勤務の数日後とのことでした。

その話に興味をもった私は、その従業員に昼間の健康管理室にほぼ毎日訪問していただき、実際に皮膚炎がどのように変化するかを観察することとしました。そうしますと、確かに皮膚炎は一定の形状を保つわけではなく、少しずつ形を変えながら柔軟に変化し、従業員がいうように、外部からの刺激により皮膚炎の状態はよくなったり悪くなったりすることが確認できました。

不思議なことがおこるものだと感じましたが、別の方でも同様の傾向を示し、皮膚炎が悪化する刺激に対する感度は個々人で異なること、またその刺激の種類によっても感度が変わることがわかりました。これは私が産業医だった時代にはあまりなかった発想であり、この直感的な経験を基に

皮膚炎の変動が日常の生活習慣と密接に関連しているというアイデアは、現在では私の皮膚科学研究の根幹を形成する重要なパーツとなっています。

私は産業医科大学の卒業生として、産業医としての義務を負っていますが、この義務をネガティブなものと思わず、ポジティブに前向きに取り組むことが、いまの時代において非常に重要だと感じています。私の経験からいえば、最終的にはすべては自分の心のもち方次第です。産業医としての任務に対して、しっかりと取り組むことを心に決め、その姿勢がよい結果をもたらしたと思います。

一方で産業医として働く期間が皮膚科医のキャリア形成においてネガティブな影響を及ぼすかもしれないと考えたこともありましたが、真剣に取り組んだ結果、その経験が楽しくもあり、自分のキャリアに直結すると実感しています。これからキャリアを重ねていく若手皮膚科医の皆さんが、皮膚科に全力で取り組んで頑張ることを心から応援しています。